

平成30年7月5日発行(毎月5日1回発行)

第58巻7月号(通巻706号)

風土



7

石川桂郎俳句鑑賞

南 うみを

仕事場へ丸太渡りに春の水

(句集「高蘆」より 昭和四十四年作)

「仕事場」というのは七畳小屋のことです。「七畳小屋」は桂郎師の執筆と編集の仕事場です。忙しくなると寝泊りすることもありますが、普段は家族の家と七畳小屋とを往復していました。そこまでの道のりが田あり、畑あり、小川ありなのです。桂郎師は今、丸太を懸けただけの小川を渡ろうとしています。春の陽気に心も弾みます。「丸太渡り」がそれを伝えていきます。

角砂糖中にコーヒー亀鳴いて

(句集「高蘆」より 昭和四十四年作)

この句は桂郎師の小説の師であり、俳句も嗜んだ永井龍男(俳号は永井東門居)の家での題詠の作品です。「亀鳴く」は、春になると亀の雄が雌を慕って鳴くという伝承に基づいた、のどかさとおかしみがある本意です。駄菓子を売っているような、「コーヒー入り角砂糖」との取り合わせにおかしみがあります。

神蔵器俳句鑑賞

南 うみを

風の盆かへすてのひら星掬ひ

(句集「幻」より 平成六年作)

「風の盆」は富山の八尾で行われる盂蘭盆と祈願の祭が習合した民俗行事です。法被や綾傘の若い男女を中心に町の人々が夜を徹して踊ります。笛・太鼓・尺八・三味線・胡弓などに合せ、「越中おわら節」を唄い踊るのです。夜更けての町流しを見ているのでしょうか。踊の仕種を「てのひら星掬ひ」と置き、満天の星空の下での幻想的な景色を出しています。この仕草は祈願につながるものでしょう。

禅寺や玉葱二百干しつらね

(句集「幻」より 平成七年作)

この句は禅寺を訪れた折の作です。玉葱を干してあるところから、若い僧が修行する禅道場でしょう。寺領に畑や田んぼがあり、自給自足に近い暮らしが見えます。堂の軒下に、採れたばかりの玉葱がずらりと並び吊られています。静かな禅寺に時折警策を打つ音が響きます。

花つむじ

南うみを

こそばいぞ蟻はひ歩くつくづくし

三鬼忌の草餅めうにねぼりつく

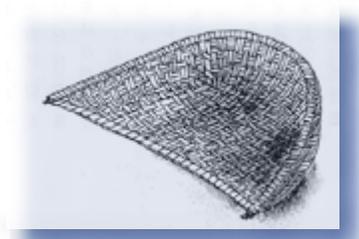
田の神に幟立ちたる桜かな

祀り果つ莫塵りて花の塵

直会の餅飛んでくる蓬かな

とかげ出て狛犬の阿をひと走り
高々と恋の蛙の泥しぶき
花つむじぶつかつて来る虚子忌かな
鍬の柄に顎を浮かすや蝶の昼
いたどりを噛めば明史の来てゐたり
にほどりの春の光を抜けられず
春の舟ゆつくりあとしざりして出でぬ

辛し和を教はりし



竹間集

同人作品



葉 桜

間島あきら

地球儀を回してゐたり蝶の昼
鳥ごゑのあたためてゐる芽吹山
十二支を刻む石像花曇り
若芝や「風土」カットに背負子の図
蛙に鳴くかへる桂郎の昼蛙
花屑の絵巻をひろぐ遠州路
葉桜となりて絵巻を巻き戻す

若 芝

内藤 静

春灯大峯あきらの書をつつむ
鳥ごゑの真中に組まれ花御堂
紙風船たためば舟の形かな
蝶とんで波立つごとし石舞台
あげひばり厩戸皇子ここを駈け
紀ノ川へ躍る流れや蕨摘む
若芝やスプリングラー喜々として

風 薫 る

宮川みね子

薫風ややさしく犬の顔をふく
釘を打つ隣のリズム風薫る
黒南風や来し方はもうふりむかず
南風吹く真つただ中へ犬放つ
美容院へゆく五月雨の日曜日
イヤリング光らせ五月中をゆく
夕方の気配に鬼女の逃げ出せり

十年一日 浜 福惠

夫逝きて十年の花の忌を迎ふ
十年一日経誦むことを花は葉に
逃水を追ふてもみたりふたり旅
飛花落花遊子の浜の夕さるる
田辺籠城碑文を読むや松の芯
子らの名にみなルビが付き入学す
田の神を迎へ田螺の這ひ出だす

白牡丹 林いづみ

西行忌弘川寺に修しけり
七曜のまぶしき日ざし芝青む
燠のごと光る水あり柳の芽
階段はマイギャラリーや蝶の屋
七十路や鎧ふことなき朧かな
花器を賞で葉を愛でてより白牡丹
藤棚の長きに雲はおしうつり

多佳子の忌 小林共代

御苑なる松の緑の脂匂ふ
梅若忌はほのこゑせし紀三井寺
母の日や息子に声をかけられし
蜘蛛の囿や隠れ道ゆく国分寺
爪染めし事とほくなり多佳子の忌
塚山へ湿りし径や著莪の咲く
緑さす恋文横町由来の碑

山桜 中根美保

強東風を鳥見の窓に受けてをり
抱かれて仔犬の仰ぐ春の空
地藏堂下を奔れり雪解水
終バスは日暮れ前とや蕨狩
さざ波なみもなさぬ棚田や山桜
春の闇載せて回送電車過ぐ
八重桜はじめの重さもてひらく

山河集

同人作品



南うみを選

木蔭まだ淡き色なり蝶の昼

岡本尚子しやうこ

我が息の七彩となるしやぼん玉
よるべなき都会の影や春の夜

湖の上に月あり花辛夷

楼上に五右衛門となりさくらかな

池の面を笙の音わたる紅しだれ

奥田茶々

ジェットコースター子の風船を持たさるる
緑摘む梯子を少しづつずらし

ゆるやかな甲斐の二万歩桃の花
老人の傘に受けをり桃摘花

発掘の刷毛のゆるびて蝶の翔つ

片桐紀美子

谷若葉空堀深く隠しけり
一瞬の風に気後れ藤揺るる

噂や朝餉の窓を震はせて
日に透けて揺るる軽さや樟若葉

手すさびの皿に山盛り草の餅
渡辺やや

口ぐちにレシピとび交ひ蓬摘む
神妙に犬の侍りて花筵

葉桜になりていつもの山の寺
歩き出す嬰の二三歩風光る

初蝶の去りたる後の庭明り
津川かほる

青年の唄ふイマジン鳥帰る
ふらここや志村喬の唄聞こゆ

屋形船行き交ふ隅田の春日かな
ゆるし合ふ人がとなりに飛花落花

風土独語／南 うみを



竹樋を水進る 若葉かな

竹生田勝次

この句は一物仕立てのようですが、「竹樋を水進る」と「若葉」の取り合わせです。若葉のころの自然の勢いを、「水進る」がうまく演出しています。初夏のエネルギーが伝わります。

発掘の刷毛のゆるびて蝶の翔つ

片制紀美子

この句は発掘作業の刷毛の動きと蝶の飛翔を重ねてイメージさせています。「ゆるびて」とすることで、刷毛から蝶がうまれたような錯覚をおぼえます。これも駭蕩感が漂っています。

てふてふや夢のつづきの散りぢりに

平田きみこ

「てふてふ」と「夢」から「胡蝶の夢」を想い起させます。夢かうつつかの意識の中で、「てふてふ」が舞うように夢のつづきが拡散する様子をことばにしています。

口ぐちにレシビとび交ひ蓬摘む

渡辺 やや

「蓬摘み」といえば「草餅」を作るためですが、最近はそのようないようです。薬膳料理に使うとか、サラダにするとかで「レシビとび交ひ」と、にぎやかな蓬摘みになっているようです。

そりかへる傘寿の指揮者鳥雲に

川井さち子

御年八十歳の指揮者が弓なりになって佳境に入っています。いったいどんな交響曲なのでしょう。「雲に入る鳥」を仰ぐような姿勢がヒントかもしれません。ユニークな世界を描きました。

木蔭まだ淡き色なり蝶の昼

岡本 尚子

この句は若葉になる前の、木立のまばらな葉陰を詠んだもので、「緑陰」とは違う淡い木蔭が捉えられています。繊細な感覚です。「蝶の昼」も駭蕩感を醸しています。

いつせいに海へみひらく豆の花

谷田明日香

「豆の花」は豌豆など夏に咲く花です。その花が海へ向かって咲いている様子を「みひらく」と表現しました。豆の莢が、海的光にいつせいに目覚めたかのようにです。明るい世界です。

天網の緩び風船失せにけり

石井 秀一

「天網」は天がはりめぐらした網のことを言います。作者は空へ放たれた風船を見失いました。それは「天網の緩び」を抜けたからだと断定しました。天の神がいたずらしたのだと。

緑摘む梯子を少しづつずらし

奥田 茶々

これは松の新芽を摘み取る作業を描きました。約定と違い指で丹念に摘み取ります。「梯子を少しづつずらし」が人物の細かな作業を伝えています。

初蝶の去りたる後の庭明り

津川かほる

「初蝶」は、その年の春はじめて見かける蝶のことです。突然現れた時のときめきと喜びを抱いたまま蝶を見送りました。その心持が「庭明り」に表れています。

先頭の子の手は腰に春の芝

中嶋 陽子

遠足の列が青々とした芝原を歩いていきます。この句の読みのポイント「先頭の子」の手の位置です。「手は腰に」にリーダーとしての誇りが見えます。「俳句は見えるように作る」の見本です。

一本のやがて夢中に蕨狩

佐藤やすこ

この句は「蕨狩」の体験から生まれました。最初は蕨がなかなか見つけれません。一つ見つけました。すると次々蕨が見えてきたのです。作者はもう無我夢中で摘んでいきます。

十センチ伸びたる赤子緑立つ

松本 胡桃

これは「赤子」と「松の芯」の取り合わせです。「十センチ伸びた赤子」と「十センチ伸びた松の芯」は、成長する命への讃歌です。単純明快に読み手に伝わりやす。

蛸蛸指して年長さんの教へをり

井奥れい子

保育園の野外活動でしょうか。池で「蛸蛸」を見つけた「年長さん」が、下の園児に「これがおたまじゃくしだよ」と、得意げに教えています。微笑ましい景色です。

風船の影追ひつけぬ高さかな

落合 絹代

作者は「風船に追ひつけぬ高さ」ではなく、「影追ひつけぬ高さ」と置きました。もっと言えば「影にさえも」です。もう手に届かない何かを、「風船の影」で示しています。

兜太逝く二月二十日の子の刻に

山田 健太

この句は金子兜太の死を悼んだものです。虚子が子規を悼んだ「子規逝くや十七日の月明に」の句よりも、もっとそっけないです。しかし兜太の巨大さを考えるとなにも飾らぬほうがよいです。

居酒屋の名は「山頭火」蜆汁

杉本薬王子

漂泊の自由律の俳人「種田山頭火」は、いまだに根強い人気があります。私たちに漂泊への憧れがあるからです。作者は「山頭火」を反芻しつつ、呑み過ぎた胃を「蜆汁」で労わります。

影踏むは万葉人か藤の花

雨宮 桂子

「藤波の咲ける春野にはふ葛の下よし恋ひば久しくもあらむ」と、藤の花はすでに万葉集に相聞歌として詠まれています。作者はそれを踏まえ、藤の花の下で読み合う「万葉人」の男女の影を思い浮かべました。

折り目なき教科書開く四月かな

大森 尚子

「折り目なき」から新入生のまっさらな教科書を想像します。いよいよ四月です。インクの香しい第一ページが開かれました。新入生の初々しい表情が見えます。

風土集



南うみを選

春の夜を一駅歩き帰らんか 舞鶴

谷田明日香

しばらくは伽藍に遊ぶ落花かな
古りたるを崩し新たな花筏
いつせいに海へみひらく豆の花
はつなつの太き水尾ひき真鯉かな
灯台の白のふくらむ春日影

神奈川

石井 秀一

天網の緩び風船失せにけり
蝌蚪の紐音符のごとく蠢動す
鯉は背をゆつたり浮かべ残り鴨
苦吟なほ桜の散るは容赦なく
読みさしの文庫の嵩や麦の秋

さいたま

竹生田勝次

竹樋を水送る若葉かな
かんばせに映りて朴の咲きにけり
養生所の井筒塞がる苔の花
首まはり細くなりたり更衣

てふてふや夢のつづきの散りぢりに 横須賀

平田きみこ

砕氷艦しらせ見に来る春の昼
舌のばし口の体操目借時
錆釘や厨の闇に浅蜩鳴く
藤の花雨は閑かに降りつづく
SLの汽笛に目覚む姫すみれ
白あんの透けて薄紅桜餅
噛むほどに花菜おひたしほろ苦く
そりかへる傘寿の指揮者鳥雲に
路地裏に牛鍋にほふ宵の春
花冷や陣屋に積める米俵
菜の花の葉陰に月の蒼さかな
先頭の子の手は腰に春の芝
浅蜩汁更紗で隔つ半個室
藤の花二列で歩くベビーカー

焼津

川井さち子

東京

中嶋 陽子